
窓際の天使は、墮天使だった。

楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓際の天使は、墮天使だった。

【Nコード】

N0137B

【作者名】

楼

【あらすじ】

窓際に座っている、無表情な少女に恋をした少年。少女は、いつも無表情で……笑うことがない。彼女の背負っているものの、重さに……少年は自分の無力さを知る。——少女を、一途に愛する少年の純愛物語。

プロローグ

俺が、彼女に出逢ったのは今から……四年前。

彼女は窓際の席で、いつも頬杖をついていた。

何がそんなにつまらないのか、彼女が笑っているところを見たことが無かった。

いつからだろう？

——そんな彼女に俺は、笑って欲しいと思い始めたのは。

その時の俺は、何の力も無い餓鬼で……無責任な言葉しか言えなくて——。

彼女の背負っているものの、重さなんて考えたことも無かったんだ。

学年の美少女

教室の窓際に、学年一綺麗だと噂される少女が居た。その少女の名は、二ノ宮 式^{「二ノ宮」の読み}。漆黒の髪に、血管まで透き通って見えそうな白い肌。小さくて紅く色づいている艶やかな唇に、ぱっちり大きく吸い込まれそうな綺麗な瞳。

まさに、美少女そのものだった。少女といっても、女の色気を醸し出している。彼女は、芸能界で活躍しているアイドル達にも劣らない位、美しかった。

いつも……窓際の席で、つまらなそうに頬杖をついている。

その授業態度が、教師軍の気に触ったみたいで各担当の教師の作った難しい問題を、良く解かされていた。

中学二年のレベルじゃないほどの問題を、彼女はすらすらと引かかることなく解いていた。……特別、塾に行っているわけでも無いらしい。

学活の時間、担任の横谷がにこにこしながら教室に入ってきた。がつちりと、ラグビーで鍛えられた体に、小麦色の肌からちらりと見える白い歯。

決して爽やかとは言えないが、それなりに整った顔をしている。

「今度の、文化祭で二年三組は……劇をする事になった!」

それを聞いた、生徒からはブーイングを受けて……窓際にいる美少女は立ち上がった教室から出て行ってしまった。——とても、不機嫌そうな顔で。

「二ノ宮は、どうしたんだ?」

きょとんと、二ノ宮の出て行く様子を見ながら横谷は言った。――鈍い奴。

俺は、二ノ宮の座っていた席に目をやる。

――いつからか、俺は二ノ宮を目で追うようになっていた。

彼女を教室で始めてみた時は、本当に……驚いた。あまりにも、整った顔立ちをしているから。

でも、その美少女は……笑わなかった。

――笑った顔は、今よりたくさんの男共のハートを射止めるだろうに。

俺が二ノ宮の席を見ているとき、隣に座っている親友の矢野が俺の肩をシャープペンシルでつついた。

「ん？」

振り返ると矢野は、黒板をシャープペンシルで差して、微笑みを浮かべている。眼鏡の奥にある、切れ長の瞳はきらりと怪しく光っていた。

一体、なんなんだろう、と黒板に目をやるとそこには、大きく『ロミオとジュリエット』と書かれていた。

生徒からは大ブーイングが巻き起こり、クラス中が猛反対をしていた。

「ジュリエットは……二ノ宮かな？」

そう、横谷が呟いた途端に男共の視線が輝いた。

「俺、ロミオに立候補ー！」

一人がそう叫んだのを最初に、「俺も」とたくさんのロミオ立候補の手が上がった。

――これは、横谷の策略だろうか？

「おー？ そんなに、立候補がいるなんて……今年の文化祭は盛り上がるなー！」

はははっと、嬉しそうに大口を開けて笑っている馬鹿を見ると
……策略ではなさそうだ。——天然の策略家というところだろうか？

その前に、ジュリエットをあの二ノ宮が引き受けるのだろうか？

悲しみの雨

今日は朝から、空気が湿つぱいと思っていたが、やはり……雨が降り出した。

ザーザーと大粒の雨が、理科担当の教師の声を掻き消して、乾いた街に降り注いでいる。

「窓しめろー！」

相変わらずの無表情で、窓際に座っている美しい天使は、シャーペンシルを器用に回していた。

「じゃ、教科書を二ノ宮！ 読め」

理科担当の橋口が、ニヤニヤと笑みを浮かべて二ノ宮を指名した。二ノ宮は教科書を黙って見つめた後、ゆっくりと口を開いた。

——これで、何回目だろうか？

さっきから、何度も……二ノ宮は教科書を読んでいる。

「……ということになり」

何度も教科書を読まされたせいか、二ノ宮の程よく高い綺麗な声は、さっきより小さく感じられた。

「立って読めよなあ。……ったく！」

そういつて、二ノ宮腕を掴んで強引に立たせようとした。二ノ宮は、怯えたように掴まれた手を振り払ってから、バタバタと青ざめた顔で教室から出て行った。

「なんだあ？」

クスクス笑いながら、「あいつ、行き成り教室から出て行くなんて……授業態度がなっていないな」とみんなに聞こえるように、呟いた。

そして、何事もなかったように授業を再開し始める。

「先生」

俺は気持ち悪そうな素振りを見せながら、先生に言う。

「気分が悪いので、保健室に行つてきます——」

「あ？ …… ああ」

俺は、すぐに教室から立ち去る。

——好きな奴が、あんなに青ざめた顔をして出て行つたのなら、
気にならない奴のほうがおかしい。

二ノ宮を探すために、俺は廊下に出た。

外は、相変わらず、ザーザーと雨は降り続けている。

他のクラスでは授業があつていて、二ノ宮が外に出たということ
は在り得なさそうだ。外に出るためには、他の教室の前を通らない
といけないから。

渡り廊下から見える屋上に、制服を着た女子生徒がウロウロして
いるのが見えた。

「二ノ宮！」

俺は屋上へ続く階段を、必死に登る。急ぐ心に、体がついていか
なくて、全然進んでいないように感じられる。そんな自分に苛立ち
ながら、俺は屋上のドアに手を掛けて勢い良く開いた。

二ノ宮は雨に濡れて、フェンスに細い指を絡ませて……下を眺め
ていた。

「おい！ 二ノ宮！」

二ノ宮の肩を掴んで、フェンスから二ノ宮を引き離した。

「……お前、熱があるのか？」

二ノ宮の冷たく濡れた、小さな肩から伝わる体温が、俺の体温よ
り高いことが分かる。

「触らないで」

そういつて、二ノ宮は俺の腕を払った。

彼女の声は、消え入りそうな位小さくて……震えていた。

「おい、にのみ——」

二ノ宮の頬に、スツと涙が伝っていた。

——胸が締め付けられたように痛い。……痛い、痛い、痛い、痛い。

俺は胸を押さえながら、二ノ宮に話しかける。

「なんで、泣いてんの？」

彼女はスツと立ち上がった、屋上のドアの方へ歩いていく。ドアノブに手を掛けてかけるまで、俺のほうを一度も振り向かなかった。

ドアを開いた瞬間……彼女は滑るように床に、倒れこんだ。

「——二ノ宮っ！」

二ノ宮のほうに慌てて、近づく。二ノ宮は苦しそうに、肩で息をしている。

俺は二ノ宮を背中に担いだ後、保健室へ足を急がす。背中が……熱い。苦しうに彼女は、息をしながらも一生懸命俺に「離して」と言っていた。

「先生！」

彼女の願いを無視して、俺は保健室に飛び込んだ。

君の涙

あの日から、二ノ宮は学校に来ていない。

——何があつたのだろうか？

空いている窓際の席に、授業中何回も目をやった。君が居ないと、俺は何の為に学校に来ているのか、よく分からない。

「先生」

放課後、俺は担任の横谷に何故、二ノ宮が休んでいるのかを尋ねた。

「ああ。……頭痛らしい。先生も、二ノ宮の家に行ったが……居ないようだったしな。親戚の家にも、行ってるんだろっかね」
顎を触りながら、横谷は言った。

「……俺、休んでた分のプリント持って行きます」

そう言つて、俺は横谷に二ノ宮の住所を聞きだした。

書いてもらつた紙を何度も見て、確認する。

——この、大きな家が二ノ宮の家なのだろうか？

そこには、大きな二階建ての立派な家が建つていた。白で統一された壁が、とても眩しく見える。

チャイムを鳴らす。——しばらく経つても、誰も出てくる様子が無い。

「二ノ宮？」

声が聞こえたような気がした。

妙な胸騒ぎが、俺を支配していく。柵を乗り越えて、ドアの前に向かった。

ドアを荒々しく叩いて、俺は何度も二ノ宮の名前を呼ぶ。

「二ノ宮？ おい、二ノ宮！」

突然ドアが開いて、服装が乱れた二ノ宮が出てきた。

「……けて。……たす……けて！」

かすれた声で彼女は、必死に胸元を隠しながら俺に告げる。

二ノ宮の手をしっかりと握って、俺は走り出した。

人気の無い公園に着いてから、俺は二ノ宮の手を離れた。

二ノ宮は俺に背を向けて、服装を整えた後「ありがとう」と小さな声で俺に告げた。

去っていかうとする、二ノ宮の腕を掴んで俺は「どうしたんだよ？」と訊ねようとした。

腕を掴んだ瞬間、二ノ宮はガタガタと震えだし、下に蹲るようにして耳を押さえた。

「……にのみ——」

「さわら……ないで」

君の口から出た、一つの願い。

「……分かった。ごめんな？ でも、どうして……」

俺は口を噤んだ。今すぐ、自分の口を縫ってしまいたかった。

——乱れた服を見れば、大体何が起こっていたのかはわかる。

「ごめん。俺、無神経で……ほんと、ごめん。……二ノ宮が、言いたくないなら言わなくていいから」

そういつて、俺は近くのベンチに座った。

「……襲われたの」

小さな口から、零れた言葉を俺は……聞き逃さなかった。何て言葉をかけて良いのか、普段女子とあまり交流の無い俺にはわからない。

矢野だったら、的確で二ノ宮が欲している言葉が言えるんだろうけど。

「……義理の兄に」

ぼつり、ぼつりと二ノ宮は話し出す。俺は、二ノ宮の顔を見るこ

とが出来なくて、地面に目を落としていた。

「再婚なんだ。……私の家」

そういつて、彼女は黙り込んでしまった。

気がついたら、抱きしめていた。小さな肩を震わせて、君は泣いていたから。

——俺が抱きしめた時、君は怯えた。

……でも、離す事が出来なくて。今の俺には、大丈夫だよって頭を撫でてあげること、気の利いた言葉をかけてあげること出来なくて。

——俺は初めて、自分の無力さを呪った。

「泣けよ。我慢すんなよ」

精一杯の言葉を、俺は小さな小さな彼女に言う。

肩を震わせて、君は……声を押し殺しながら泣いた。

声を押し殺して泣く、彼女の姿を、俺は……守りたいと強く思った。

ねえ、……俺がもし、君の事を好きだといったら、君はどんな顔をする？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0137b/>

窓際の天使は、墮天使だった。

2010年12月18日03時26分発行